
魔法少女リリカルなのは THE BATTLE of StrikerS

燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは THE BATTLE of Strikers

【Nコード】

N0119Y

【作者名】

燕

【あらすじ】

六課に現れた謎の魔力反応。

そこに向かったなのは前に現れたのは・・・自分？

二つの時間軸が交差するとき、物語の結末はどう変わっていくのだろうか。

「魔法少女リリカルなのは THE BATTLE of Strikers」始まります。

プロローグ それは小さな異変なの？（前書き）

深夜、唐突に書いてみようと思いついて描いた話。

当然書き溜めてなどいないので更新頻度は低いと思うので、期待せずにお待ちください。

それでは。

ブローグ それは小さな異変なの？

機動六課隊舎。今は昼休みということで前線メンバーは食堂でそれぞれ食事をしている。

「魔力反応？ シュミレーターから？」

「そうなんです、なのはさん」

フォワード達と一緒に食事しようと食堂に入ったのはだが、そこにシャーリーから通信が入った。

「今は誰も使っていないはずだけど・・・」

「はい、ですが複数の魔力反応が出てきて、それも徐々に強くなってきました。です。」

八神部隊長が、できればなのはさんに様子を見てきて欲しいそうで・・・

「お食事のところすみません」

「にはは・・・まあ、しょうがないよ。それじゃあ、ちょっと行ってくるね」

「あれ、なのはさん！どうしたんですかー！？」

「スバル、もうご飯は終わり？」

「いえ、おかわりをとってこようと思ったたら、なのはさんがいたから・・・」

「なにかあったんですか？」

「うん、シュミレーターから未確認の魔力反応がでてるみたいで、ちよつと調査に行くんだ。休憩入るのが遅れちゃうから、午後の訓練は少し遅れるかな」

「わかりました！皆にも伝えておきますね！」

「うん、お願い」

そしてなのはシュミレーターに向かった。

そこになにがあるのか、そして物語はどう変わっていくのか・・・

プロローグ それは小さな異変なの？（後書き）

時間にして約10分強で書いたので、当然短いです。

一応これからの展開の構想はあるので、

完結できるよう頑張ります。

次回、魔法少女リリカルなのは THE BATTLE OF STRIKERS「来訪」

まだブローグ 来訪（前書き）

なんとか翌日に次まで持って来れました。
それでは。

まだプロローグ 来訪

数分後。なのはがシュミレーターの前に到着すると、そこには・・・

「あ、なのは。どうしたの？ お昼は？」

「あれ？ フェイトちゃん、どうしてここに？」

「えっと、それはね・・・」

「ん、高町か。お前も一手どうだ？」

そこには、フェイトとシグナムがいた。

「フェイトちゃんとシグナムさんも、はやてちゃんに？」

「いや、最近テストタロツサが初出勤以来体を動かしていないということだな、久々に模擬戦でも、と言う話になってシュミレーターを使用しに来たのだが・・・」

「うん、そしたら、弱い魔力反応があるみたいだからどうしたの？ なんて。今はフォワードの子たちも食堂のはずだし・・・」

「それで、主はやての件とは？」

「それは・・・」

なのはが事情を説明しようとしたその時。

「なのはさん！ ってフェイトさんにシグナムさんも」

「シャーリー、どうしたの？」

「それが、先ほどなのはさんに調査を頼んだ魔力反応なんですけど、魔力値が急激に上昇し始めたんです！ ついさっきまでEランクあるかないかだったのが、今はもう推定AAランク相当まで上がってきて・・・」

「これはただごとではないな。テストタロツサ、我々も現場に向かう」

「はい、シグナム」

「お願いします。シャーリー、反応はシュミレーターのどのあたり？」

「はい、今みなさんがいるところから、約400m先の森の中です。」

反応は4つ、そのうち一つは・・・

えっ・・・す、推定Sランク!?」

Sランクと叫びたら管理局にもめつたに無い程の大魔力だ。3人は直ちにシュミレーターの中の森の中へと向かった。

~~~~~

10分ほど前。シュミレーター。

「・・・のは、なのは!」

「うん・・・フェイト・・・ちゃん?」

「なのは! よかった・・・」

・・・今は新暦75年のはずだ。だがそこには、10年前のP・T事件、闇の書事件の際の姿をしたなのはとフェイトがいた。

「えっと、ここはどこ? 確か私たち、ロストログアを回収しようとして・・・」

「うん、私も目が覚めたんだけど、さっきまでいたところとはどう見ても違うよね」

「そうみたいだね。あそこは荒地で、植物なんて生えてなかった。・・・そういえば、はやてちゃんとリンフォースさんは!?」

「お、起きたみたいやな、二人ともねぼすけさんやなあ」

「「はやて(ちゃん)!!」」  
「うわっ、そんな大声出さなくても大丈夫や、ちゃんと聞こえてるよ」

「そ、そうじゃなくて・・・」  
「なんではやての体が透けてるの!?!」

そう、はやては体が半透明で、見かたによってはそのまま消えてしまっているかと思わせる状態だった。

「うーん・・・それはたぶん、うちがベルカ式の使い手やったから  
だと思っくんよ。あのロストロギア、ミッドの魔法陣が描かれてたか  
らな」

「じゃあはやての体はそのままなの？・・・足あるよね？」

そのフェイトの言葉に、なのはも思わずはやての足を見る。

「良かった、生えてる」

「ちょ、フェイトちゃん、なのはちゃんまで人を幽霊みたいに・・・  
ひどいなあ、まったく・・・よいしょつと」

「ごめんね、はやてちゃ・・・ん？」

「あはは・・・ごめん、はや・・・え？」

「ん？ どうしたん？・・・あれ？」

「私（はやて）ちゃん（）、歩けてる!？」

## まだプロローグ 来訪（後書き）

と言う訳で、何故か10年前のはやてが普通に歩けます。その理由は・・・まあロストロギアの仕業ということ。

そして名前だけ登場のラインフォー。ス。

一応なのポとのコラボのつもりなので、彼女も消えずにはやてと過ごしています。

次回には彼女も出して、Strikers組と出会つところまでは行きたいと思います。

次回、魔法少女リリカルなのは THE BATTLE of Strikers 「昔の・・・私？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0119y/>

---

魔法少女リリカルなのは THE BATTLE of StrikerS

2011年10月30日04時23分発行